

## —あおぞら—

### カムイの庭によろこそ —第57回大気環境学会(札幌)—

第57回大気環境学会 年会長  
北海道大学大学院工学研究院  
村尾 直人

蝦夷島の名は聞く者異域の感を懐き、開拓使の稱は人をして治外の遐境を想はしめき。嗚呼是れ舊北海道の史的事実を表す名稱なり。

今の北海道は殷富の新境進歩の別天地なり。土地膏腴、住民快活、人力化工相待て、山海の事業勃然として全道に起これり。田産・鑛物・漁利・林業・至る處土塊をして黄金に化せしめんとす。(中略) 其善く今日を致せる所以のものは、五十年間、官民協力の結果にして、移住者活動の報酬なり、眼前の繁栄何物か前人汗血の結果にあらざらんや。

島田三郎(大正七年六月、北海道開拓五十年史序文より)

札幌市中心部から西に約15 kmほどに位置する手稲山山頂(標高1023.7 m)にある北海道放送(HBC)の送信所施設をお借りして、数年ほど前から観測を行っている。手稲山は札幌市民にとっては身近なランドマークのひとつで、夏は登山、冬はスキー客(ただし山頂は上級者)で賑わう。数カ月に一度、点検や故障対応で現地へ赴くが、天候に恵まれれば、西側には石狩湾から石狩平野に広がる札幌市街地、そして増毛連山、南東側には遠方に羊蹄山(蝦夷富士)を望む美しい眺望を楽しめる。

そのような大パノラマを前に思いを馳せるのは、わずか数代で原野を開き、このような大都市を作り上げた先人たちの営みである。札幌の開拓は明治2年(1869年)の開拓使設置に始まるので、わずか140年ほどで200万人近い人々が暮らす大都市を作ったことになる。その開拓が困難であったことは想像に難くない。未知の大地に様々な想いを抱いて入植した土地は、ヒグマが闊歩する昼なお暗い原生林だっただろう。しかも半年は雪の中である。自分達で建てることのできた粗末な住居での生活はどれほど厳しいものだったことか。人々は生きのびるため、まずは飲み水、食料、燃料を確保し、野生動物からの危機への対応を行い、家を整え、また揉め事や争いを取め、子供の教育を行っていったことだろう。それはつい「昨日」のことである。今ではそれらはすべて「公」にゆだねられている。その一方で、私たちは生きる力や知恵、危機を伺う能力を失ってきたようだ。

素晴らしい発展を経験した近代が終わろうとしていると皆が感じ始めたときに、私たちはとてつもない災厄を経験した。震災と津波が残した悪夢のような現実と、行方が見えない原発事故を前にして、誰もが茫然とし、緊張し、そして祈っていたように思う。そんななか、「昨日」までの人類が何をしてきたのかを問いかける言葉をよく見かけるようになった。北海道では、いうまでもなくアイヌの人々のことになる。自然に対する慎み深さを共有するアイヌコタンに見られる社会とそれを破壊したシサム(和人)が築いた社会について知り、伝統的社会にある叡知を私たちの生活に取り入れ、さらに社会全体に影響する施策に生かしてゆくこと。それは大阪大学の総長だった鷺田清一が震災の年、卒業生に式辞で語りかけたある映画のセリフのようでもある。

忘れていいこと

忘れたらあかんこと

それから、忘れなあかんこと

本年会は、東日本大震災とそれに続いた福島第一原子力発電所の事故以後に北海道東北支部が担当する初めての全国大会である。「千年に一度のことが起こったなら、千年の時間に耐える言葉で考えたい」(平川克美)との言葉に深く頷いたものだが、震災から5年経ち、いつのまにか私たちの視野の拡がり数は数年、数カ月に戻ってしまったかのようだ。「環境」を名前に持ち、それを掲げる私たちは、千年は無理にしても百年くらいの視野は持っていたいものだと思う。

北海道の秋をお楽しみください。